

朴が実行した人痘法。無事終わった時の安堵感が行間に読み取れる。信州の在に住む小林一茶家にも悲劇が襲った。日録風句文集『おらが春』に書かれている娘「さと」の罹患と酒湯行事など、子を失った親の悲しみに心を打たれる。飢餓、貧困、無知、疾病に翻弄される人々：「つゆの世ハつゆの世ながら さりながら」。

一方疱疹から治った子どもは「町屋迄笑いの通る三番湯」と元気の良い笑い声をたてた。

明治になって、夏目漱石はイギリスに留学した。儒教的な倫理観、東洋的美意識や江戸の感性を持つ漱石が日本人としてのアイデンティティと顔に痘痕のある一東洋人として外国で生きることは、どのような心理的負担を強いるものであったか。『吾輩は猫である』の記述を読むと心痛む思いがする。

大村藩の痘瘡罹患者に対する姥捨てに近い扱い方も、その非人間的な冷酷さを恐れるが、人痘法、牛痘法の普及と共に種痘山として受け入れられ、若者の通過儀礼を体験する場として変容して行くのは興味深い。

著者は後書きで「小著に記載した四六点の文学作品を通じて、当時の人々が如何に恐るべき痘瘡と闘い、且つ多くの犠牲を払ったか、その悲惨な歴史がおわかり頂ければ望外の幸せである」と記しておられるが、痘瘡というのは死をもたらず病、幸いにして命を取り留めても、終生、顔の醜形、皮膚の引きつり、手足の不自由さ、失明などにより、

人々の人生にさまざまな陰影を落とした疾患であった。

広い商店の売り場に置かれた数々の商品を見ながら散策するような、読む側の知識、興味の方向、人生観等によっていかようにも楽しめる汲めども尽きない魅力あふれる著書である。乞うご一読。

(小田 泰子)

〔思文閣出版、千六〇六一八二〇三京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五―七五―一七八一、定価五〇〇〇円十税〕

清水 寛 編著

『日本帝国陸軍と精神障害兵士』

わたしは「戦争と精神科医療、精神医学そして精神医学者」の主題でここ数年、精神医学史学会および十五年戦争と日本の医学医療研究会で発表をつづけており、また戦争中の精神病院および療養所での死亡率をしらべてきたので、清水さんのお仕事にはまあからふかい関心をもってきた。だが、埼玉大学教育学部教授であられた清水さんの論文は、主として『障害者問題研究』や『埼玉大学紀要教育学部(教育学科学)』などに発表されてきたので、ごく少数のものしかよむことができていた。今回、清水さんが門下の細瀨富夫さん、飯塚希世さんとかかれたこの領域の論文

がまとめられたのは、なんともありがたいことである。

「はしがき」にある「日本を含め、世界はすでにへ新しい形の暴力と戦争」の状況にまきこまれている。その意味で、私たちは、今、もはや「戦後」ではなく「新たな戦前」を生きているのではなからうか。」ということばに、出発点となる清水さんの問題意識がみられる。戦争史・軍事史研究は近年、軍制史・戦史記述の段階をこえ、市民の戦争体験の共有などもふくむ多角的な段階にはいつている。戦時体制では障害者は劣等待遇原則の対象にされ、戦争は障害者問題を浮き彫りにする。

第I編「陸軍懲治隊と陸軍教化隊」の第1章「陸軍懲治隊と徴兵制」では、まず一八七〇年以後の徴兵制の変遷がのべられている。軍備拡大を背景に、痴愚の人も軍隊にくりこまれる可能性がありました。徴兵制は不適格者を軍隊から排除するとともに、ある程度の障害をもつ者もすくなくならず軍隊におくりこまれた。そして、知的能力の低さもあって「軍令」、「軍律」違反をくりかえす人を対象に陸軍懲治隊（のち陸軍教化隊）が設立された。懲治隊にいれられたなかには社会主義者もいた。徴兵令初期の一八九一年の不合格者は八四、八七一名で、そのなかで白痴、癲狂は七六〇名（〇・九〇％）であった。「腋臭甚シキモノ」は不合格格理由病類別順位が六番目で、三、三四九名（二・九五％）のぼっていた。これについて著者はなにもいわれていないが、腋臭がそんなにいみじらわっていたのか、不思議で

あり、どなたか腋臭の社会史をとりあげていただけまいかと感じた。

第2章「陸軍教化隊と国家総力戦体制下の徴兵検査」では、不合格とされた人が「非国民」、「国賊」よばわりされたとの証言がおもい。兵力が急激に膨張するなかで、「不良兵」、「弱兵」、「異常兵」が顕在化してきて、一九三八年には国府台陸軍病院が、全陸軍の精神障害兵士の診療・研究の中心をなす「特殊病院」として改組された。

第II編「日本帝国陸軍と精神障害兵士」は本書の中核をなす部分である。外地から還送されて小倉、広島、大阪の陸軍病院で、さらに治療を要する、あるいは兵役免除の対象として検査を要する、とされた精神障害兵士九、七八一名が国府台病院におくられてきた。国府台病院では、教授級の精神医学者で人格者でもあった諏訪敬三郎陸軍中佐（のち大佐）が院長をしており、その下には全国から、教授一名をふくむ優秀な精神科医があつめられた（のちに精神科の教授になった人が一〇名いる）。さらに、その病床日誌八、〇〇二件が、第二次大戦の全期間を通じてこの軍医だった浅井利勇氏により複写保存されていた。浅井氏には「うずもれた大戦の犠牲者―国府台陸軍病院・精神科の貴重な病歴分析と資料」（国府台陸軍病院精神科病歴分析資料・文献編集記念刊行委員会・東金市、一九九三年）の著もある。また、のちの国立国府台病院から創立二〇周年記念として、『第二次大戦における精神神経学的経験―国府台

陸軍病院史を中心として』が一九六六年に刊行された。諏訪がこの編集者代表であった。こういった基盤があつて本書の研究も可能になったことを、特記しておかなくてはならない。

第3章「国府台陸軍病院収容の精神障害患者の概況」をみると、もつともおおかた病名は精神分裂病三、七五六名、ついでヒステリー八〇五名である。つづく「日本帝国陸軍と知的障害兵士」の第4章では、前記のような病床日記にもとづく分析がなされている。入院して知的障害（今でいう）と診断された患者は四六四名で、その数は戦争激化にもなつてきました。そのなかに白痴六名、重症痴愚五一名がおり、戦争末期には重症痴愚の増加がいちじるしい。

第5章は、「日本帝国陸軍と戦争神経症兵士」と題されている。はじめに「戦争神経症は、戦時に軍隊内に発生した神経症の総称である」とある。精神医学で一般的なものであるこの定義にはすこしく疑問がある。内地で空襲などの状況下で発病した神経症も、戦争神経症ではないか。わたしは、植松七九郎、鹽入圓祐が調査した「空襲時精神病」の資料を入手して、二〇〇六年の精神医学史学会で発表した「精神病」といつてもそのほとんどは、心因反応であつた。沖縄戦にまきこまれた県民の心の傷はほとんどしらべられずにきたし、戦後間もない時期にしらべれば内地民衆における戦争神経症例もかなりみいだされたはずである。ここでは、この面がまったく無視されてきたことを指摘す

るとどめておく。

井村恒郎は、戦時の精神科外来で神経質・神経衰弱群（N）がへり、ヒステリー・心因反応群（H）がふえたことを指摘した。H/N比（二〇〇倍）は東大精神科外来で、一九三四年に一〇（男で三）だったのが、一九四三年には五一（男で三九）に達した。ところが、国府台陸軍病院におけるH/N比は、一九三八年に一一二、一九四四年には三七六に達した。つまり、ヒステリーこそが戦争神経症の代表なのである。病床日誌でみると、戦争神経症類縁疾患は計一、三七二名で、うちヒステリーは、既述のとおり八〇五名である。当時の陸軍では、敵性語である「ヒステリー」にかえて、臆病（呉秀三が「ヒステリー」の訳語としてふるい病名からひろいだしていたもの）が頻用されていた。

第4章でも第5章でも、かなり詳細な症例が提示されている。ここでもい出すのは、学生時代からインタン時代に国立国府台病院・国立精神衛生研究所の加藤正明のところにかよっていたときのことである。かれの外來に、腰痛で腰がのびせなくなっているわかい自衛隊員がきていた。もちろん、整形外科面の問題はないと神経科にまわされてきたのである。次回いったとき加藤から、インミタール面接をしたら、「自衛隊なんて人間のいるところでない！」とさげんで、腰はすつとのびましたよ、ときいた。加藤（かれは国府台陸軍病院に勤務していた）はさらに、戦争中は

ヒステリーで一日中ほとんど逆立ちしつばなしの人もいましたよ、とはなしてくれました。

第6章は「敗戦前後の精神障害患者の状況」で、国府台陸軍病院での状況、その他の陸軍病院での精神障害患者の状況、国府台陸軍病院からの転院精神障害患者の死亡事例について記述されている。ここでは、終戦後旬日をへずして新鮮ヒステリーの症状がほとんどすべてきれいに消失していたという細越正一の報告を紹介するだけにしておこう。

第三編は「元・精神障害兵士の戦後史」である。その第7章「元・精神障害兵士の援護制度と実態」では、傷痍軍人武蔵療養所（↓国立武蔵療養所）、傷痍軍人下総療養所（↓国立下総療養所）のことが紹介されている。両方で一九四四―四七年に、食糧不足のために死亡者が激増した（といっても、一般の精神病院の状況はもっとひどかった）。二〇〇四年度末の戦傷病者特別援護法にもとづく精神・神経障害の療養患者は、入院八四名、入院外五九名である。第8章「未復員」精神障害者を訪ねて」は、二〇〇二年から二〇〇五年にかけて著者が、四病院、一社会復帰施設で療養中の元・精神障害兵十九名に面会した記録である。

「結びに代えて」では、韓国・朝鮮元精神障害軍人・軍属の問題が提起され、平和の大事なこと強調されている。著者（清水）が第一章の発表をしてからすでに二年たった。

精神科医によるいくつかの先行研究があったとはいえず、

これは、平和への切実な願いに裏打ちされた、精神障害兵士についての全面的な問題提起であり、圧倒的な内容であって、よみおえてしばらく言葉がうしなっていた。

とはいえ、細部にいくつかの疑問を感じた。これは原論文を一本にまとめるにあたっての編集上の手違いだろうが、症例番号一七が重複しており、二五一ページ表四〇の症例番号と本文中のそれとがぐいちがっている。三一四ページの症例では、二か所での記載があわない。三一―ページに「進行麻痺」と他の疾患（麻痺性痴呆症）を合併している場合」とあるが、麻痺性痴呆症とは進行麻痺のふい呼び方である。

三三二ページには、下総療養所で一九四五年に在所者一五五名中死亡者が計三九名とある。ところが、入退所者数の表をみると、前年度末在所者が一六一名、年間入所者が計三〇八名で、年間在籍計四六九名中の死亡三九名なのである（一五五名は、四六九名から退所（死亡をふくまない）計二七五名、死亡三九名をひいた一九四五年度末の在所者数である）。国立武蔵療養所および国立下総療養所について、戦傷病者特別援護法による精神障害入所者数の推移が表示されているが、ここで入所者となるのは年度末在所者のことである。清水さんの今までのお仕事ではほかにも、こういった点のあいまいなものがあつた（それは、よられた資料の表示し方のあいまいさによつたのだらうが）。

ここで、ある施設における入退所（院）動態のまとめ方

をみておこう。「入所者」というと、「入所している人」と「入所した人」との両方の意味がある。そこで、ある時点で入所している人は「在所者」と、ある期間に入所した人は「入所者」とわけると、ある期間の在籍者数は期間当初（あるいは前期末）在所者数に期間内入所者数をくわえたものである。死亡者数は退所者数にくわえて、再掲とする。このようにきつちりわけないと、死亡率にはたいへんな違いがでてくる。一五五名中の三九名なら死亡率二五・二%だが、四六九名の三九名は八・三%である。なお、武蔵療養所については、表の五〇と五三とで在所者数がぐいちがっている。

もう一つ気になるのは、事例の記述し方である。たとえば、埼玉県出身、父も本人も僧侶、東京□□学院仮卒業、野戦重砲兵第一八連隊補充隊所属二等兵という症例がでてくる。職業が農業ならよかるうが、僧侶となると、この人が特定される可能性を否定しきれない。個人情報保護という面からは、事例の記述にはもうすこし慎重さが必要であらう。

さて、いくつか気になる点は指摘したものの、戦争か平和かの岐路にたっている今、できるだけ多くの人によんでいただきたい本である。平和をまもるために、そして、障害者がさらに傷つくのを防止するために。

なお、清水さんの編集による『資料集成 戦争と障害者』（第一期全七冊）の刊行もおなじ不二出版からはじまってお

り、本書の資料となったものは全部はいつている。一冊二〇、〇〇〇円と高価なものだが、身近な図書館に購入することを、あわせておすすめしたい。

（岡田 靖雄）

〔不二出版、〒一三三〇〇三三東京都文京区向丘一―一
一―、電話〇三―三三二―四四三三、二〇〇六年二月
二五日、A五判、三八二頁、本体定価五八〇〇円〕

溝入 茂 著

『明治日本のごみ対策——汚物掃除法はどのようにして成
立したか——』

まず著者の紹介から書く。

京都大学工学部卒、東京都衛生局、労働経済局、千代田区、文京区を経て、東京都環境科学研究所に勤務し、この間、「明治前期の廃棄物規制と汚物掃除法の成立」をまとめ、早稲田大学で政治学博士となられた。その後、『ごみの百年史』学芸書林・昭和六二年刊、『近代ごみ処理の風景』日本環境衛生センター・平成六年刊、「生活のごみ」『日本人の暮らし』収載・講談社・二〇〇〇年刊等の著作を書き上げられた。前二著に対し一九九五年には廃棄物学会著作賞を受けておられる。

今回の『明治日本のごみ対策——汚物掃除法はどのよう